

特別展

# 天馬

—シルクロードを翔ける夢の馬—

4月5日(土)~6月1日(日)

東・西新館

主催：奈良国立博物館、  
(財)全国競馬・畜産振興会



ベガサス装飾付柱頭片 フォーリ・インベリアリ博物館 (イタリア)



赤像式クラテル (部分)  
アグロ・ファリスコ博物館 (イタリア)



化粧皿 (有翼馬) 個人蔵



ベガサス飾付ブローチ メトロポリタン美術館 (アメリカ)



鍍金馬 茂陵博物館 (中国)



●竜首水瓶 東京国立博物館  
(法隆寺献納宝物)



◎聖徳太子絵伝 (部分) 橘寺



●四騎獅子狩文錦 (部分) 法隆寺

馬は人類のパートナーとして長い歴史をと共に歩いてきました。より速くへ、より速く、そして力強く、美しく…。人類の飽くなき夢と理想を担い、馬は国家や文明を支えてきました。天馬は、この夢をかなえる究極の生き物として、紀元前二千年以上もの昔に想像され、シルクロードを介して各地に広がりました。

最も有名な天馬は、ギリシア神話に登場するペガサスです。英雄を乗せ、怪物の退治に活躍するペガサスの姿は、紀元前六〜四世紀頃のギリシア陶器に好んで描かれています。本展では、イタリアやアメリカから代表的な壺絵が出品されます。また、ローマのアウグストゥス皇帝が建てたマルス神殿から出土した大理石製のペガサス装飾付柱頭片は、まだ現地でも公開されたことのない作品として注目されます。

一方、アジアの地では、ササン朝ペルシアにおいて天馬は神聖な動物のついでに数えられていました。法隆寺に伝わる四騎獅子狩文錦は、そのペルシアに端を発する要素を取り込み、中国の初唐頃に作られたものです。シルクロードの交流を象徴するこの名品に加え、中国・新疆ウイグル自治区で発見された類似の錦の断片も展示します。

そのほか中国からは、神仙世界に息づく天馬の姿を描いた金銀象嵌筒形金具(河北省文物研究所や、「天馬」と称えられた汗血馬の造形として名高い鍍金馬(茂陵博物館)、天馬

を吉祥文様の一つとして表す銅鏡などの名品も見逃せません。さらに、日本の仏教絵画については、仏伝中の釈迦の愛馬カシタカをはじめ、聖徳太子の乗ったという甲斐黒駒、弘法大師がお釈迦様に会ったために乗ったという白馬など、翼がなくとも飛ぶ「天馬」があるかと思えば、密教のほとけたちが坐る翼の生えた馬もいるなど、あまり意識されてこなかった、隠れた「天馬」が見出されます。

国内外、時代やジャンルを超えて、ユーラシア大陸を舞台にこれだけの天馬が集まるのは、世界でも初めてのことです。シルクロードの東の終着地とも言われるこの奈良から、文化の絆をたどる胸ときめく旅に出かけましょう。

(吉澤悟)